

◆ 後 記 ◆

「研究通信」百号をお届けする。貴重な原稿をお寄せ下さった各会員に御礼申し上げますとともに、たまたま記念すべき百号を編集することになったことを光栄と存ずる次第である。もつと執筆をお願いしていた方もあったが、さわめて世俗的な、また、それゆえに会計的に切実な期限に迫られたので発行を急いだ。今後お送り頂いた分については次号にのせることでお赦し頂きたい。それで、その切実で、さし迫った期限というのは、一月二五日から郵料の値上げである。とにかく今までの郵料の三倍以上になること、請け合いである。そのために、本号を一月二四日中に発送することから逆算しての止むをえない措置であった。しかし、今回の郵料値上げは会計上、実にいたい。誌代の印刷費よりも郵料の方が高くなるのである。次号以降、何とか送付方法も考えねばならない。折りたたんで定型にしてということも考えている。名案があったらお教え願う。どうも記念すべき百号で、愚痴をこぼすのは見つともないが、背には腹は変えられない。その意味でも当面、円滑な会費の納入が望まれる。

会費の納入といえば、前号で苛敏請求のお願いをした。その点は大変に痛み入っている。すでに御納入頂いた方も多いと思われるが、振替口座の関係で一旦慶応義塾大学の方に入り、それがある程度までとまったところで、こちらに連絡されることになっている。その上で、領収証をお送りすることになるので、お含み置き願いたい。

ところで、今号は五〇頁という特大号になった。百号記念だからといえば、その通りであるが、実は一月七日の東北地区での研究会

での討論が長時間にわたったのを収録したため長くなったのは御覧の通りである。討論要旨をまとめたのせればよかつたかも知れないが、共通課題が未決定の状態で、そのことを考えるために開いた研究会での討論過程をできるだけ詳細に会員各位に知って頂きたかったのである。一方で郵料の節約を考えながら、印刷費のかさむことをやったのは矛盾であるかも知れないが、とにかく値上げ前に郵料を節約してでも大部のものをお届けしたかった気持はわかつて頂きたい。編集を終える段階で、本年度の共通課題の提起者である島崎会員から、「農村生活の歴史と現状——農民にとつての生活破壊とは何か——」としたのでは、社会科学にとつての農民生活の破壊の事実を解明するという問題意識が稀薄になってしまふのではないかと懸念が示され、せめて主題と副題が逆にならないものかという意見が寄せられた。東北での研究会では、そうした懸念への配慮は十分にしたつもりで、その意味でも討論の過程を掲げた意味はあると思う。もちろん、東北の研究会で出て来たものはあくまで案である。できるだけ早い機会に拡大委員会を開いて、正式の共通課題が決定されることが望まれる。山形にいて意を尽くしたつもりでも隔靴搔痒の感は免れない。

事務局をお引き受けしてから三ヶ月余り、この間、会の運営についていろいろな御意見を頂いた。村研には実に多岐にわたる問題に関心を持つ会員のいることがわかる。それが村研のメリットで、それを生かせるような会でありたい。その意味をこめて、村研草創期の会員諸氏の玉稿で飾ることをえた本号をお届けしたい。(Y)